

成人前期男性の結婚観

加藤 千恵子* 山岸 陽子**

要約

本研究では、成人前期男性の結婚観の現状について検討するため、新たな尺度を作成した。結婚観尺度は、性別役割意識を中心とする『伝統的結婚観』と個に対する考え方を示す『シングル志向性』の2因子を得た。特に、『シングル志向性』は、個を重視する姿勢の現れを示し、現代の若者を象徴する因子と考えられる。この因子の存在によって、これまでの結婚観に新たな視点が与えられたと言える。また、今回作成した結婚観尺度の調査項目から、結婚に対する考え方は働くことに対する考え方とも関連していることがうかがえる。従って、今後の課題として、結婚観同様、仕事観の現状を捉え、また、それらの関連についても調査する必要がある。

Abstract

In this research we developed new measurement standards in order to explore the attitudes of young adult males toward marriage. Regarding the measurement of marriage attitudes, we looked at two factors: "traditional marriage attitudes" that lie at the heart of conscious gender roles, and the "urge to remain single" reflected in one's way of thinking toward oneself. In particular, the "urge to be single" indicates a high regard for the self, and is emblematic of contemporary young people. From this factor, it could be said that a new perspective on marriage has come into being. In addition, from the survey provisions in the measurement standards toward marriage we have created, it may be seen that attitudes toward marriage are connected to those of working. Accordingly, as a future topic of interest, it will be important to examine views toward work as well as marriage, and to explore the connections between them.

1. はじめに

成人期の発達を考えた場合、生涯発達の視点から、成人期は決して安定した時期ではないと言える。成人期には、身体的な成熟はピークを過ぎて安定するものの、それまでとは異なった質の社会的な変化にさらされる時期

であり、精神的には“おとな”として変化し続ける。思春期までは学校や家庭等、比較的限られた環境で社会化が図られるが、成人期になると、その範囲はぐっと広がる。成人期には、就職や結婚等によって、かかわる社会的場面は思春期以前よりもさらに広がり、受ける刺激が多種多様になるだけではなく、それ以前のように守られる立場から、責任を引き受ける立場になっていくのである。

また、近年、日本の社会が激しく変化していることによって、成人期以降の発達に何らかの影響を及ぼしている可能性がある。劇的な変化の中でも経済、産業構造に生じている変化は激しく、それは、個々人の日々の生活や考え方に大きな影響を与えている。情報化社会、グローバル経済化、不況等による社会経済の質的な変化に伴って、企業がその変化に耐え、生き抜いていくために、日本の雇用体制は大きく変化している。それは大きな社会的な変化となって、個々人の働き方にも変化をもたらした。そのことは、当然日々の生活を営む上での基盤となる個々人の考え方にも何らかの変化をもたらしていると言える。そして、成人前期においては、働くことと結婚することという重大なライフイベントが控えており、それらへの関わり方や考え方にも変化をもたらしていることが推察される。

その現状を表すものとして、結婚に関して、まず、日本における非婚化・晩婚化が挙げられる。厚生労働省の人口動態統計によると、1975年には平均婚姻年齢（男女とも初婚）は男性26.9歳・女性24.4歳、2005年には男性29.3歳・女性27.7歳であり、晩婚化の傾向が顕著であることがわかる。この世代の非婚化・晩婚化の一因として、高度成長期が終わる1970年代後半から、いわゆるパラサイト・シングルの数が増加してきていることも挙げられる。このことは、総務省統計局の労働力調査において示されている。20～34歳の全人口のうち、親同居未婚者は1980年には29.5%であったのが、2006年には46.4%となった。そして、この世代には経済的ゆとりがあることも、結婚を遅らせるまたは未婚にとどまる要因となっていることがうかがえる。その一端が垣間見えるものとして、前出の同調査において、親同居未婚者における完全失業の割合は、1980年では4.1%であったが、2006年では8.8%となり、およそ倍増している。また、山田（1999）⁷⁾によると、横浜市の若者調査（1997年12

*総合情報学部 総合情報学科

**横須賀市児童相談所

月実施)を引用し、20歳から39歳までの男女とも、未婚で親同居の経済的ゆとり度・レジャーゆとり度が既婚者より高いとしている。

また、結婚のタイミングに関する意識の変化も、非婚化・晩婚化に影響していると思われる。国立社会保障・人口問題研究所(2006)⁶⁾の調査によると、結婚意思がある18歳以上34歳未満の独身男性のうち、“ある程度の年齢までには結婚するつもり”という“結婚適齢期志向”と、“理想的な相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない”という“理想の相手志向”を比較すると、1987年には“結婚適齢期志向”の者が60.4%であったが2005年には51.9%へ減少し、逆に、“理想の相手志向”の者は、1987年に37.5%であったが2005年には46.7%へ増加した。このように、1987年から18年後には、“結婚適齢期志向”を持つ者が約10%減少し、“理想の相手志向”を持つ者が約10%増加している。つまり、“結婚適齢期志向”が希薄化し、理想の相手が見つかるまで結婚しないと考える者が増加してきていることがわかる。このことから、結婚しようとは思いうが理想の結婚相手が見つからないためにやむを得ず独身でいる者が増加している可能性があり、さらには、その中でも結婚への意欲そのものが低下してきている可能性があることが推察される。従って、適齢期志向の変化や理想の相手志向の強まり等、結婚に対する考え方が変化してきていることも、現代の非婚化・晩婚化の背景として挙げられる。

以上のように、成人前期の大きなライフイベントとして、主に‘結婚に関すること’を取り上げてきたが、社会状況の変化や自分たちの親の世代の影響を受け、現代の若者が少なくとも親世代とは異なる結婚観を持っていると考えられる。また、成人前期には、特に男性にとっては、‘働くこと’と同様に‘結婚すること’という、生涯にわたる人生の重大な決定を迫られている。従って、この時期に独身である者にとっては、まさに人生の選択を迫られており、結婚に関する考え方(配偶者の選択、家庭を持つこと)が問われていると言える。さらに、男性の発達について、近年、女性の生き方が多様になってきたことによる男性への影響が、注目を集めている⁸⁾。それは、主に女性の高学歴化と社会進出によって、職業や結婚・出産・育児等についての選択肢が広がり、複雑なライフコースが出現したことによって、男性の側にも役割の変化が求められているのである。すなわち、「男が外で働き、女は家庭を守る」という伝統的な家庭だけでなく、共働き家庭の増加や、結婚しても子どもを作らないなど、様々な家族形態の出現によって、男性は職業人

としての役割だけではなく、父親として、夫として、一人の男性としてなど、一個人として様々な役割が求められるようになってきている。

そこで、本研究では成人前期の独身男性を対象者とし、結婚観に関する尺度作成を試みた。その理由としては、社会状況の変化に伴って、結婚に対する考え方が多様化してきていると考えられ、その実情を把握するために、現代の価値観を反映する尺度を作成する必要があると考えたためである。

2. 先行研究と仮説

現代日本の結婚観は、結婚意思、相手に望む条件、性別役割分業に対する意識等が変わりつつある。

男性の結婚意識に関して、結婚適齢期とされる20代・30代の独身男性を対象者とした調査⁴⁾の結果、従来の調査・研究において支持されている男性が結婚難に陥っているという結果^{1) 2) 10)}が高学歴の独身男性についてはあてはまらないことが明らかになった。つまり、伊藤²⁾らによる結婚難においては、結婚したくない女性が増えているために結婚したくても結婚できない男性が増えているということであったが、加藤による調査結果では、男性は自らの意思により結婚するか否かを選択しており、自分の理想とするライフスタイルと結婚によるライフスタイルの変化や、結婚相手との価値観の一致等を重視し、結婚に対する葛藤を抱いていた。また、労働の長時間化に伴い自分の余暇が減少するため、家庭生活と仕事等の自分の目標とするものとの両立は難しいと考え、結婚により自分の余暇時間が拘束されるという危惧を抱いていることが推察された。では、現代の男性にとって、結婚はどのように捉えられているのであろうか。結婚するか否かの選択に影響を及ぼしているのは結婚に対する考え方であろう。以下に、結婚に対する考え方を示唆すると思われる調査結果をいくつか取り上げていく。

まず、性別役割分業意識に関して、第4回勤労生活に関する調査(労働政策・研修機構、2004)が挙げられる。全国の20歳以上の男女に対して「家庭生活と仕事について望ましいと思う生き方」について尋ねたところ、「男性は仕事優先、女性は家庭優先」とする割合は女性41.6%、男性46.6%であった。高度成長期に定着した性別役割分業観も近年、崩れつつあることが示され、男性にとっても性別役割分業意識が明らかに変化していると言える。従って、性別役割分業に対する意識を、結婚観の一つの重要な側面として、捉えていく必要がある。

また、結婚の意思に関しては、国立社会保障・人口問

成人前期男性の結婚観

題研究所の「第13回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査」(2006)⁶⁾においても調査が行われている。生涯の結婚意思について尋ねたところ、「一生結婚するつもりはない」と回答した者は、1982年には男性2.3%女性4.1%であったが、2005年には男性7.1%女性5.6%となった。つまり、結婚意思そのものを持たない者が増えてきていることがわかる。同調査で現在独身に留まっている理由としては、25歳未満の若い年齢層では「まだ若すぎる」、「必要性を感じない」等の結婚の必然性の欠如や、「仕事(学業)」、「趣味や娯楽」等の競合するものの存在、さらに「自由や気楽さを失いたくない」等、束縛されることへの恐れを挙げていた。また、「必要性を感じない」、「自由や気楽さを失いたくない」を選ぶ者は、25歳未満の若年層よりも25歳以上の層で多かった。同様のことが、18歳から75歳の未婚・既婚を含めた男女に結婚に対する考えやイメージを捉えるために行った調査³⁾においても示された。結婚は困難を伴う大変なものであるという結婚に対する否定的感情に関して、未婚女性・未婚男性ともに既婚女性・既婚男性よりも有意に言及頻度が高い傾向が見られた。このことは、未婚の男女が、結婚に対する、束縛されて自由を失うといった否定的なイメージに伴う不安を有していることが示唆される。つまり、一人でも不自由しない現代において、結婚の必要性の薄れ、自由でいたいという価値観の重視が見て取れる。以上のことから、結婚したくない、または性別役割分業意識を中心とした従来の結婚を理想的なものとは捉えておらず、個の意識が強まっているということも、重要な結婚観として考えられる。従って、結婚観のもう一つの重要な側面として、シングルに対する志向性についても考慮する必要があると思われる。

この他にも、上記の性別役割分業に関する考えと結婚を理想と捉えないという個の重視という考えを支持する研究がある。25歳から36歳までの未婚者と既婚者を含む男性25名に対する調査を基にした結婚観の研究である^{5) 9)}。この研究では、非構造化面接法によって個別に行った面接内容をKJ法に準拠してまとめた結果、『シングルでいること』、『結婚に対する評価』、『仕事と家庭のウエイト』、『家族のあり方』、『伝統的性役割観』、『妻・彼女に望むこと』、『子どもについて』の7グループにまとめられた。そして、最適尺度法によって要素間の関係を検討した結果、個人の考え方に一貫した方向性がなかったことが明らかになった。すなわち、上述した先行研究から、結婚観が多様化していることが示唆され、個人内に『伝統的性役割重視』等の伝統的な考え方と『家

族の個人化』等という考え方があり、前者は性別役割分業に関する内容、後者は結婚するかどうかということに関する内容として捉えられた。

以上のことから、本研究では、結婚観の下位尺度として、従来の日本的な結婚観をどの程度持っているかを測定する「伝統的結婚観」及び、結婚するかどうかという「シングル志向性」という2軸を仮定し、結婚観尺度の作成を試みる。

3. 予備調査

尺度作成にあたり予備調査を行った。

(1) 方法

調査は大学生の男女94名を対象として、2006年8月に実施した。

調査項目作成にあたっては、非婚化・晩婚化、結婚生活に対する意識の変化等に関する先行研究^{1) -5) 8) -10)}等をもとに、従来の伝統的な結婚観か否かという「伝統的結婚観」の因子をまず想定した。次に、結婚において何をどれだけ重視しているかという「シングル志向性」の因子を想定し、2因子からなる尺度作成を試みた。

(2) 結果

結婚観尺度は16項目への回答で因子分析(主成分)を行い、因子負荷量が0.4以下の3項目を削除した。削除した項目は、「妻の年齢は夫の年齢より低い方が良い」、「妻の学歴は夫の学歴より低い方が良い」、「結婚したからといって幸せになれるとは限らない」の項目である。再度、13項目への回答で因子分析(主成分)を行ったところ、固有値1.0以上の因子を2つ抽出し、ヴァリマックス回転の結果に基づき、各因子の解釈を行った。第一因子に負荷量が高かったのは、「家事は男性よりも女性の方が向いている」、「妻は働くとしてもパートの方が好ましい」、「主に夫が家計を担い、妻が家事を行った方がよい」、「子育ては母親がメインで父親はサポートの方がよい」等であったため、この因子を「伝統的結婚観」と命名した。全部で7項目の評定値を加算し、伝統的結婚観の得点とした。信頼性係数 $\alpha = .80$ であった。第二因子に負荷量が高かったのは、「生涯独身でもよい」、「結婚しない人生は考えられない」、「結婚に魅力を感じる」、「結婚しないほうが楽だ」等であったため、この因子を「シングル志向性」と命名した。全部で6項目の評定値を加算し、シングル志向性の得点とした。また信頼性係数 $\alpha = .74$ であった。以上の結果をもとに本調査を行った。

4. 本調査

(1) 方法

予備調査をもとに、本調査は 20 代から 30 代の未婚の社会人男性 86 名を対象として、2006 年 9 月から 10 月に実施した。

(2) 結果

予備調査では、13 項目で因子の累積寄与率は 37.99% と高かったため、項目にまとまりがあると判断し、本調査でも同じ項目を用いた。その結果、全項目で因子負荷量が .40 以上となったため、13 項目を最終尺度項目とした。結果を表 1 に示す。

第一因子は「家事は男性よりも女性の方が向いてい

る」、「妻は働くとしてもパートが好ましい」、「主に夫が家計を担い、妻が家事を行った方が良い」等の項目の因子負荷量が高く、性別役割分業に関する 7 項目でまとまったため、「伝統的結婚観」と命名した。因子寄与率は 27.14% となり、信頼性係数 $\alpha = .84$ であった。第二因子は「生涯独身でも良い」（逆転項目）、「結婚しない人生は考えられない」、「結婚に魅力を感じる」等の項目の因子負荷量が高く、シングルでいることに対する魅力についての 6 項目でまとまったため、「シングル志向性」と命名した。因子寄与率は 24.90%、信頼性係数 $\alpha = .86$ であった。以上の結果から、想定した 2 因子が妥当であることが示された。

表1 結婚観尺度

	第1因子 伝統的結婚観	第2因子 シングル志向性
家事は男性よりも女性の方が向いている	0.78	0.05
妻は働くとしてもパートが好ましい	0.74	0.19
主に夫が家計を担い、妻が家事を行った方が良い	0.71	0.00
子育ては母親がメインで父親はサポートの方が良い	0.70	0.15
夫の身の回りの世話をするのは妻の役割である	0.69	-0.07
妻の仕事は家事に影響のない範囲が良い	0.59	0.17
妻の収入は夫の収入より少ない方が良い	0.48	-0.03
生涯独身でも良い●	-0.14	-0.83
結婚しない人生は考えられない	0.20	0.81
結婚に魅力を感じる	0.19	0.80
結婚しない方が楽だ●	0.12	-0.77
ある程度の年齢までに結婚した方が良い	0.39	0.62
結婚して得られるものよりも、独身で得られるものの方が大きい●	0.21	-0.42
因子寄与率	27.14	24.90

(注) ●は逆転項目を示す。

5. まとめ

比較的一様であると考えられてきた成人前期男性の発達は、必ずしもそうであるとは言えなくなってきた。そのため、本研究では、成人前期男性の結婚観の現状を捉えるために尺度作成を試みた。

結婚観尺度において、性別役割意識を中心とする『伝統的結婚観』と個に対する考え方を示す『シングル志向性』の 2 因子を得た。『伝統的結婚観』は、従来の伝統的結婚観を重視するかしないかということを示す因子であった。伝統的結婚観を重視する者は、家事や育児は妻が主に担うべきであり、仕事は家事育児がおろそかにならない範囲で行って欲しいと望み、伝統的結婚観を重視しない者は、家事育児を共に担い、妻が仕事をする事についても妻の意向を尊重する傾向が見られた。『シン

グル志向性』は、現代の若者を象徴する因子と言えよう。これは結婚において個を重視する姿勢の現れを示している。シングル志向性が高い者に関しては、今後、結婚しないという選択をする者もいるであろうが、結婚というスタイルの中で、個を重視した新しい結婚の形が築かれるのかもしれない。他方、シングル志向性が低い者は、結婚願望が強く、結婚によって安定した生活を送ることを望んでいると考えられる。

以上のことから、現代の若者は結婚に対する考え方の多様化していることがうかがえる。それは、ある意味では選択肢が増えて好ましい面もあるが、別の側面では価値観や生き方が多様化し、人生の選択がより困難になっていると言えよう。

また、多様化しているのは結婚観のみではないと考え

成人前期男性の結婚観

られる。それは、特に、成人前期の男性にとって、結婚観以外に重要な価値観として仕事に関する考え方が挙げられる。近年、日本において仕事と家庭のバランスが注目されていることから、これらの価値観が互いに影響を与えていると考えられる。今回作成した結婚観尺度の『伝統的結婚観』、『シングル志向性』のいずれの調査項目からも、成人前期の男性にとって、結婚は働くことに対する考え方や仕事と家庭との兼ね合いを考えずにはいられないという背景があることがうかがえる。従って、今後の課題として、結婚観同様、仕事観の現状を捉え、また、それらの関連についても調査する必要がある。そのことによって、現代日本人の結婚観について更なる視点が与えられると思われる。

参考文献

- 1) 伊東秀章：未婚化に影響する心理学的諸要因：計画行動理論を用いて 社会心理学研究, 12(3), pp.163-171(1997).
- 2) 伊藤裕子：結婚年齢, 発達, 61, pp.55-57(1995).
- 3) 加藤千恵子：現代日本における結婚観の構造, 常磐大学大学院人間科学研究科 人間科学論究, 10, pp.45-52(2002).
- 4) 加藤千恵子：高学歴独身男性の結婚意思に関する事例研究, 大分県立芸術文化短期大学 研究ノート, 41, pp.87-104(2003).
- 5) 加藤千恵子, 山岸陽子：若年層高学歴男性の仕事観に関する事例研究—PAC分析による—, 日本産業カウンセリング学会第8回, pp.114-117(2003).
- 6) 国立社会保障・人口問題研究所：第13回出生動向基本調査, 結婚と出産に関する全国調査, 独身者調査の結果概要, (2006).
- 7) 山田昌弘：パラサイト・シングルの時代, p.204, 筑摩書房, 東京(1999).
- 8) 斉藤浩子：父親・男性の発達, 東洋・柏木恵子(編), 流動する社会と家族Ⅰ, 社会と家族の心理学, ミネルヴァ書房, pp.197-226(1999).
- 9) 山岸陽子, 加藤千恵子：成人期男性の結婚観および仕事観—KJ法および最適尺度法による— (2), 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, p.318(2003).
- 10) 湯沢雍彦, 川崎末美：未婚男性勤労者の結婚難の諸要因：A社千葉工場の場合, 家族研究年報, 15, pp.14-23(1989).